もう一度――コリントにおける「かしら」、ヴェール、そして髪[1]

Hans-Jörg Ronsdorf · 2021年1月 · 2026年10月改訂

毎年のように、とはいえ次第に少なくなりながら、周知のとおり決して易しくないこのパウロの箇所（コリント第一11:2-16）についての論考が発表されてきました。なぜ私がこれについて書くのでしょうか。2020年11月に出版した男女の役割についての拙著「Frauen, vergebt uns!」（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）[2]の中で、私は一つの章でこの箇所を取り上げました。しかし、後から振り返って適切だと考えるほどには、体系的にも詳細にも扱っていませんでした。というのも、本の中で私は、トーマス・シルマッハー（Thomas Schirrmacher）がその著書『Paulus im Kampf gegen den Schleier!』（『ヴェールと闘うパウロ！』）で展開した「引用説」を非常に強く取り入れていたからです。引用説もまた一つの仮説であり、十分にもっともらしいものの、最終的には証明されていないことを、私はその本の中で指摘していました。本稿では、一人の女性神学者と一人の男性神学者の研究の助けを借りて、引用説に頼らなくても納得のいく説明にたどり着いています。

この箇所は、私たちにとってなじみのない文化的状況、すなわち一世紀のギリシア・ローマ文化の中へ語りかけています。それも、どこか任意の場所ではなく、当時ギリシアにあったローマの植民都市コリントです。パウロにとって知らない場所ではありませんでした。彼はそこで18か月働きました。彼はこの町のことを隅々まで知っていたのです（使徒18:1-18）。

本稿では、比較的新しい二冊の本から頻繁に引用します。これらは、この難しい箇所をよりよく、新たに、あるいはより深く理解する助けになります。特に一節ごとの考察では、私には彼ら以上にうまく表現することができなかったので、主としてこの二人の著者に語ってもらうことにします。一冊目は、エックハルト・J・シュナーベル（Eckhard J. Schnabel）の（記念碑的で卓越した）注解書『Der erste Brief des Paulus an die Korinther』（『パウロのコリント人への第一の手紙』、シリーズ「Historisch-Theologische Auslegung」〔歴史的・神学的注解〕）です（シュナーベルは保守的で「聖書に忠実な」福音派の神学者であり、教授です[3]）。これほど根拠がしっかりしていて、これほど多くの出典を挙げてこの箇所を徹底的に論じている注解書を、私は他に知りません。私はそのすべての結論に同意しているわけではありませんが、このテーマではいつでもそういうことがあるものです。二冊目の本は『Paul and Gender』[4]という題です。シンシア・ロング・ウェストフォール（Cynthia Long Westfall、歴史家・神学者）は2016年に、この箇所および性の問題に関わる他のすべての重要なパウロの箇所について、英語圏で広く注目された研究を発表しました。彼女は文化的状況を徹底的に考慮しながら、数えきれない注解者たちも一般の聖書読者も格闘している大きな問いに、新しい光を当てています。二人の著者は多くの見解で一致しています。（ウェストフォールからの引用は、脚注に頁数のみを記します。）

私の目標は、パウロの論証が何であり、何が彼をまさにこのように書かせたのかを（私自身のために）明らかにすることです。**問題は女性たちだったのでしょうか、それとも男性たちだったのでしょうか。そして、もし最終的にそれがはっきりしたとしても――ここではそれを保証するこ**

とはできず、読者一人ひとりが自分で判断しなければならないのですが――なお次の問いが残ります。私たちは21世紀にそれをどう受け止めるのでしょうか。

これは、しばしば近視眼的かつ過剰な熱心さで主張されるような「聖書に忠実かどうか」の問題ではなく、正しい聖書理解の問題です。いわゆる聖書への忠実さを本当に真剣に考えるのであれば、聖書研究の労苦を（何度でも）引き受け、時間を注がなければなりません。そうでなければ、それは見せかけの敬虔さにすぎない、絶えず繰り返される空疎な決まり文句のままです。あるいは、境界線を引いてはならないところに境界線を引くための、または熟考や慎みこそが求められるところで忠実さを誓わせるための「シボレテ」にさえなってしまいます。

文脈化

文脈化とは、まず聖書をその背景の中で学ぶことを前提とします。そのうえで初めて、その箇所が今日何を語っているのかを探ろうとするのです。したがって、愛の戒めや偽りを言うことの禁止のような直接的な戒めはあまり問題になりません。それらを時代を超えたものとして受け入れることに、私たちは何の問題もありません。事情が異なるのは、外見のことや、今日ではもはや知られていない習慣や慣行（偶像に献げた肉など）が問題になる場合です。

パウロは明らかに、ギリシアのコリント、そしてローマ帝国全体における当時の習慣や風習に言及しています。当時の文化へのこの言及を避けて通ることのできる注解者も聖書読者もいません。そして実際、ほとんどすべての注解者がまさにそうしています。もっとも、歴史的事実とその解釈についての知識には大きな差があり、それによって聖書解釈の質も左右されます。（私のようにブレザレン運動の出身の方々のために言えば、ダービー（Darby）とケリー（Kelly）も、ヴェールと髪のテーマをもっぱら本文の内側だけで説明したのではなく、当時の文化にも言及していました。頭のかぶり物は文化的なテーマであって、聖書的・神学的なテーマではないからです。）パウロは、コリントの人々にとって確かに重要だったこの問い（あるいは問いの数々）に答えるために、文化的な習慣を創造の記述の光のもとで評価し、さらにはそれを根拠づけることにさえ成功しています。

パウロはその論証の中で、時代を超えた規範や、超越的に何世紀にもわたって、ましてや創造の初めから有効であり続ける不変の行動規範を打ち立てているのではありません。**パウロが論じているのは、福音の自由があるにもかかわらず、同時代の人々の誰にもつまずきを与えないようにどうふるまうか、ということです。たとえそれがキリスト者の自由を制限することになっても、です。**それは神学的に命じられているから、あるいは根拠づけられているからではなく、まさにこの章が始まる直前に彼が次のように述べている黄金律に従うからです。

コリント人への手紙第一 10章31-33節：こういうわけで、あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。ユダヤ人にもギリシア人にも神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべての点ですべての人を喜ばせようと努めているのです。

この「黄金律」は、すぐ後に続く箇所を解く鍵です。というのも、パウロが論証によってコリントの人々に伝えようとしている規則は、「すべてにおいて神に栄光を帰す」ことと、同時に、当時ふさわしくないとされ、あるいは（神学的ではなく）文化的な意味で恥とさえ見なされていた外見やふるまいによって、同時代の人々や隣人につまずきを与えないこととの組み合わせだからです。コリントのキリスト者たちはもともとこうした習慣の中で育ってきたのであり、それによって人々をキリストのために獲得できるのであれば、それを守ること、あるいは耐えることは、高すぎる代償ではありませんでした。パウロは、その遵守を勧めてはいても、ギリシア・ローマ文化の外面的なことを自分のものとしているわけではありません。むしろ、さまざまな側面を考慮する道を見いだそうとしているのです。それは、一方では男と女の創造の出来事を省察して真剣に受け止め、他方では人々一般（社会）の感覚を全面的に考慮に入れるという、綱渡りのような歩みです。

ここで先取りして、10節に触れておきます。そこでパウロは（ほとんどの翻訳とは異なり――これについては後で詳しく述べます）、女性が自分自身の頭に対する権威を持っている、つまり頭を覆うか覆わないかを決める権威を持っていると、はっきり述べています。しかし、彼女はその決定を、まさに上に挙げた基準と、これから述べるさらなる側面とを考慮しながら下すべきなのです。

この箇所の適用範囲

パウロが、コリントの人々の自由にもかかわらず受け入れてほしいと願っている勧めは、どの領域に当てはまるのでしょうか。

それは集会です！祈ることと預言することは、どこででも、いつでもなされてよいし、なされるべきですが、コリント人への手紙では（特に14章を参照）集会の主要な内容です。どの場所、どの機会が考えられているのかは、手紙の文脈の中で明らかにされなければなりません。

礼拝における女性の沈黙の命令を支持する人々は、女性が祈り、預言するというパウロの確認を、ありとあらゆる場所に移してしまいます。ただし礼拝だけは除いてです。これは説得力がありません。なぜなら、頭のかぶり物は人前のためのものであり、人に見られなければならない、あるいは見られうるものだからです。そうでなければ意味をなしません。さらに、12-14章では御霊の賜物が余すところなく、性別による何の制限もなしに分け与えられており、そして――繰り返し強調されているように――集会では**すべての人**が参加します。ですから、女性に沈黙を命じる戒め（コリント第一14:34-35）は、これと矛盾するものではありえず、11-14章の光のもとで、そして最終的には手紙全体の文脈の中で答えが出されなければなりません。そうすると、それはキリスト者たちが集まっていた家の教会において妨げとなる、女性たちの語りのことだということになります。おそらくそれは、霊的な分かち合いを妨げたり、口を挟んで気を散らせたりする語り、あるいは妻たちが集会の場で夫に恥をかかせる――今日の言葉で言えば「面目をつぶす」――ことで夫たちにとって恥となるような語りでしょう。いずれにせよ、解釈学の基本原則を守るかぎり、それは一般的な発言禁止ではありえません。そうなるのは、これらの節を切り離し、まるで完全にそれだけで独立しているかのように見る場合だけです。

パウロは女性の敵か？

この箇所が**歴史的批判的な眼鏡**を通してどのように受け止められているかは、次の引用から読み取ることができます。「この箇所は、教会と、教会の影響を受けた社会における女性の抑圧に寄与してきた。どれほど好意的に解釈しても、この箇所は、21世紀に男女の関係についてキリスト教神学的に語られるべきことには決して合致しない。男女関係における平等と正義、そして異性愛的イデオロギーへの批判的な向き合い方は、パウロには知られていなかった。このような箇所がなおどのような意味で霊感を与えうるのかが、問われなければならないだろう。それとも、この箇所は正義を損なってきたものであり、本来は彼の時代に地上の正義のために働いていた一人の人間の過ちであったがゆえに、今日の視点からはただ拒否するしかないのだろうか。」[5] この見解は、この箇所について広く行き渡っている受け止め方を代表しており、私はそれにまったく同意しません。聖書本文に対して否定的・批判的な姿勢をとれば、必然的にこの見解に行き着くのです。

もう一方の、**「聖書に忠実な」側**では、この種の批判は激しく退けられ、次のように断言されます。平等や同権ではなく階層的な服従こそが、初めからの神のご計画である。それはジェンダー哲学という「時代精神」に抗うものだ、と。

私たちは、この二つの極端な立場のどちらかを選ばなければならないのでしょうか。両方の立場を混ぜ合わせることなく、この箇所を説明する別の道はあるのでしょうか。混ぜ合わせることは、私にとっては安易な妥協でしょう。

どちらの説明にも屈することなく、パウロに、彼の13通の手紙と使徒の働きに、そしてもちろんパウロが模範としたイエスに方向づけられた読み方があります。**「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい」（コリント第一11:1）**。これは、女性を差別するような発言の余地をまったく残しません。**いいえ、パウロは女性の友なのです。彼はキリストの栄光の輝きの中で真理を知り、それを見た人です。彼のユダヤ的・ヘレニズム的な女性観もまた、福音の光の中で改められたのです。**

パウロにとって大切なのは、つまずきとならないこと、しかし同時に福音に忠実であり続けることです。男性にとっての頭のかぶり物は、出自や背景によっては、宗教的な祭儀における通常の習慣でした。信者たちの集まりの中では、男性は祈ったり預言的に語ったりするとき、頭を覆うべきではありません。それに対して女性は、男性とまったく同じことをするとき、頭を覆うべきだとパウロは言います。しかも、すべての女性がです。当時の社会で頭を覆うことが許されていなかった女性たち、すなわち女奴隷や解放奴隷の女性、あるいは未婚の女性も含めてです。こうしてこの両方の指示は、部分的には文化に逆らうものともなります。ここでは文化が福音の核心と矛盾しているからです。また、すべての女性が通りで、つまり公の生活の場で頭を覆うべきだという指示でもありません（アルミン・バウム（Armin Baum）やシュナーベルに反して）。なぜなら、文化は最下層の女奴隷たちにそれを禁じていたからです。いずれにせよ、既婚女性が頭を覆う、あるいはヴェールをかぶるのは慣習でした。

またパウロは、男性への服従のしるしとして頭のかぶり物を支持しているのでもありません。男性に対する女性の服従、低い身分と価値は、いずれにせよずっと以前から石に刻まれたように固定されていました。それをわざわざ見せびらかす必要はなかったのです。この覆いには具体的な機能がありました。言うなれば機能的なしるしであって、階層的な象徴という性格は薄いか、まったくありませんでした。

パウロは誰に向けて語っているのか。誰が正されるべきなのか。

ほとんどすべての注解者は、ここで語りかけられているのは、新たに得た自由を理由に、当時一般的だった頭のかぶり物をこれ以上着けることに抵抗した女性たちだと確信しています。そしてそのかぶり物は、男性への服従の表現であり、その承認でもあったとされます。なぜなら、この箇所で明らかに創造から導き出されているように、女性は男性一般に、そして妻は夫に特に、階層的に従属している、あるいは下位に置かれているからだ、というのです。もし誰かが「階層」という言葉に引っかかり、むしろ「創造の秩序」や「聖なる秩序」について語りたいのであれば、次のことを自覚すべきでしょう。その人は、男女の価値と尊厳がまったく等しいとしながらも、やはり「不平等」を神の秩序として支持しているのです。男性が導いて責任を負い、女性は服従して従う、というわけです。

もし女性の解放的なふるまいがこのパウロの箇所のきっかけであったのなら、なぜこの箇所が**キリストが男のかしら**であるという言葉で始まっているのかを説明しなければなりません。この書き出しは注意を男性たちに向けています。しかも、あたかも男性たちこそがこれに続く論証のきっかけであったかのようにです。

シンシア・ロング・ウェストフォールは、コリントには、女性たちに通常の頭のかぶり物をやめるよう勧めた、あるいは迫った男性たちがいたという見解をとっています。身分の高い既婚女性たちは、自分の覆いを取ることを望みませんでした。それは彼女たちが育ってきた文化の習慣に反することでした。彼女たちの頭のかぶり物は保護であり、尊厳、品位、道徳的な清さの表現でした。それは服従の象徴ではありませんでしたが、妻として夫に属していることのしるしではありました。

女奴隷や解放奴隷の女性、未婚の女性（そしておそらくやもめも？）は頭を覆うことが許されておらず、最下層の身分として性的な接近にさらされていました。売春婦は頭を覆わず、ヴェールもかぶらず、髪を短く切っていました。つまり、どのような形であれ短髪にしていたのです。そのような女性たちが信仰に入ったらどうなるでしょうか。パウロは手紙の冒頭（1:26-29）で、信仰に入ったのは、身分の高い人や高貴な人ではなく、素朴で貧しい人々が多かったと述べています。ですから、こうした女性たちには、社会の習慣に反して頭を覆ってもよいのだと告げられなければなりませんでした。なぜなら、新しい契約と新しい創造の教会においては、ガラテヤ人への手紙3章28節も裏付けているように、身分はもはや何の役割も果たさないからです。

コリントのキリスト者たちの文化的状況のいくつかの側面

この問いを探り、歴史家のデータに頼るときにはいつでも、パウロが自分の時代と社会をどう見ていたかに注意を払うべきです。この世の流れ、したがってそれぞれの文化にも、それが福音と矛盾するときには、調子を合わせてはならないのです（ローマ12:2)。福音における「歩み寄り」には限界があります。ギリシア人に対してギリシア人のようになる（コリント第一9:20-22参照）とは、偶像の神殿で食卓に着き、偶像に献げた肉を食べることを意味するのではありません。ちなみに、この世の流れについてのパウロの評価は――ある時代の習慣や風習とは異なり――時代を超えて常に有効です。

本稿のテーマは、性の問題と、それに関わるふるまいや外見をめぐるものです。

「ギリシア・ローマ社会において、女性の『正しい』ふるまいについての立法とその施行は、為政者たちの主要な関心事であった。家庭の無秩序が帝国の安寧に対して反乱的な影響を及ぼすと信じられていたからである。」[6]

「異邦人の間でのパウロの宣教が成功するためには、キリスト者の女性たちのふるまいが、一世紀のギリシア・ローマ世界一般で女性たちが実践していたことと一致していなければならなかった。それゆえ、パウロが教会と家庭における男女の役割に言及するとき、その性別に関わる関心はしばしば宣教的なものであり、彼の意図は、信者たちが文化に溶け込みつつ、同時に倫理的に清くあり続けることであった。一世紀の文化への適応は、二十一世紀の文化への適応とは別のことであった。男女が通常どのようにふるまい、互いに接するかについての現代西洋の考え方は、ギリシア・ローマ文化の考え方とは明らかに異なっている。」[7]

「文化の構成要素をなすパトロン・クライアント関係と互恵性は、夫と妻の関係をも形づくっている。」[8] パトロンとは、たとえその富や財産によるだけであっても、地位や身分が上位にある後援者や支援者のことです。「ギリシア・ローマ世界では、夫と妻は通常、パトロン制度・関係において対等ではないパートナーであった。妻が多額の持参金を結婚に持ち込んだ場合を除き、夫は恩恵を与える者として、妻は婚姻関係における従属的な当事者として機能した。」[9]

「(コリントは）男性が手にすることのできるあらゆる種類の性的活動を提供する場所であり（そのため『コリント人のようにふるまう』とは性的不品行にふけることを意味した)、『コリントの娘』という言葉は売春婦の婉曲表現であった。上流階級は存在せず、その代わりにコリントの繁栄によって成り上がりの階級が生み出された。しかしパウロは、コリントの教会がその会員を裕福なエリート層からだけでなく、主として地位や力を欠いた人々から得ていたことを指摘している（コリント第一1:26)。」[10]

ですから、あらゆる階層の人々が、それまでキリスト教的な社会化をまったく経ずに信仰に入り、信者の交わりに加わったとき、彼らはなお生涯にわたる悪習の影響を受けていました。性は空気の中に漂っており、どこででも手に入るものでした。教会はこうしたテーマやふるまいに直面していたのです。

集会の実際

神が港町コリントで、パウロとその同労者たちを通して呼び出された大勢の民（使徒18:10）は、一か所に集まることができませんでした。劇場や闘技場を借りれば別ですが、主として素朴な人々が営む新しい祭儀にとって、それはまったく不可能なことでした。ですから、彼らは家々に集まりました。大きな家や小さな家、いくつかの邸宅、そして大部分は簡素な家や住まいにです（エペソでは今日でもそれを見ることができます）。集まるときに食事を準備したのは女性たちでした（一部は持ち寄りもしました）。主の晩餐は共同の食事の一部でした。

家の教会の男性と女性には、パウロが述べていることが当てはまりました。ウェストフォールはそれを次のようにまとめています。「したがって、男性と女性の違いは、教会における役割の区別ではなく、むしろ彼らがそれらの役割においてどのように異なって機能するかである。女性と男性は同じ職務において神に仕えることができるが、性別に固有の外見を含む異なる要件がある。それは、男性には何の制約もなく女性だけが制約されるという二重基準の表れではない。両者とも制約を受けているのである。」[11]

「最後にもう一度、パウロの論証が意図する主張には含まれないものの重要な一点を指摘しておきたい。パウロはごく当然のこととして、女性が教会の集会で祈り、預言的に語ることについて述べている。つまり、女性たちは男性たちとまったく同じように、神とその御言葉の現実を公に言葉にしているのである。」[12]

「公」とは何か

「公」とは通常、誰とでも出会う領域のことを指します。コリントの市場、港、あるいは偶像の神殿です。結局のところ、自分の家の外はすべて公の場です。

礼拝の集会は、裕福な、あるいは身分の高いキリスト者の私邸で行われ、同じようにあまり裕福でない人々の家や部屋でも行われました。それは公の場だったのでしょうか。確かに市場の状況とは比べられませんが、事情に通じていない人や信仰を持たない人も、こうした集会に出入りすることができました。聖霊によってそこへ導かれたか、キリスト者に招かれたかのどちらかです。その意味で、集会もまた閉ざされた集団ではなく、すべての人が生ける神に出会う場なのです。

ですから、この集会において風習や慣習を守ることは、男性にとっても女性にとっても等しく大切です。信者でない人がつまずくのではなく、神によって、その聖なる力強い臨在によって、心を刺されるようにするためです（コリント第一14:16, 23-25）。

何人かの注解者は、これによって集会の外での服装規定も示されているのかという問いを立てています。よく見れば、それはこの箇所のテーマでもなければ、コリントの人々の問いでもありません。ここで当てはまるのは、誰にもつまずきを与えないようにというコリント人への手紙第一10章31-33節の黄金律です。既婚女性は家を出るとき頭を覆います。女奴隷はそうしませんが、パウロが書いているように、礼拝の中では覆うのです。

コリントにおける頭のかぶり物

これについて、いくつかの引用と、もう少し詳しい考察を加えます。私は確信しています。頭のかぶり物とヴェールの習慣を理解していない人だけが、このパウロの箇所を今日にそのまま当てはめるのです。しかもそれは、一次元的な白黒の解釈学によってであり、それは最終的に狭められた律法主義を正当化することになります。私はそれにしばしば出会い、自分自身でも経験してきました。

「ミシェル・オーアバック（Michelle Auerback）は、ヴェールについての論証を次のように要約している。**『象徴や表明は、それが何を意味するかを知っている文化の中でのみ意味を持つ。』**しかし伝統的な聖書学では、ほとんどの人が、コリント人への手紙第一11章3-16節におけるヴェールは『服従』を意味すると想定してきた。**古代東地中海文化において、ヴェールが女性たちにとって持っていた意味を理解しようとすることなしに**、あるいは多くの現代文化でなお広く用いられていることに取り組むことなしに、である。」[13]

「ブルース・ウィンター（Bruce Winter）は、ローマ帝国の時代には『ヴェールをかぶった頭は、既婚女性に期待されていた慎み深さと貞潔の象徴であったと確実に想定できる』と述べている。」[14]

「しかし今や私たちは、女性のヴェール着用を実践している文化の女性たち自身の語りに触れることができ、それは別の物語を語っている。イスラームとユダヤ教には、敬虔な原理主義的女性たちの強い流れがあり、彼女たちは、コリント人への手紙第一11章3-16節におけるパウロの理由づけとよく似た理由からヴェールをかぶっている。とはいえ私たちは、時代錯誤に陥る危険のある後代の人類学的な類例に全面的に依存しているわけではない。**ヴェールを脱ぐことを拒む女性たちの歴史と、ヴェールを着用する理由は、アッシリア文化にまでさかのぼることができる。**」[15]

「**パウロの関心は、預言し祈る教会のすべての女性――女奴隷、解放奴隷の女性、未婚の女性、やもめを含む――に及んでいるように思われる。**ローマのマトローナ[16]の服装規定は、彼女の身分と、『ローマ社会における性的能力のある女性としての彼女の地位と役割』の両方を表していた。**他方、ヴェールをかぶらない頭は性的に近づきうることを意味したため、女奴隷や解放奴隷の女性にはヴェールの着用が禁じられていた。**」[17]

「ヴェール着用の規定は男性の特権であった。指針を定める必要性を最も当然のこととして認識するのは男性たちであっただろう。**ローマの慣行では、男性も女性も祈るときに頭を覆った。パウロは明らかに、諸教会の男性たちに、ローマの慣行に反して頭を覆わずに祈るよう教えていた（コリント人への手紙第一11章4節）。そのため男性たちは、雄ガチョウによいことは雌ガチョウにもよい、と考えたのかもしれない。しかし、男性の覆われていない頭は神の前での彼のへりくだりのしるしであったのに対し、女性の覆われていない頭は神の前での女性のへりくだりのしるしではなかった。むしろそれは、彼女の性的な近づきやすさについての合図を発するものであり、誘惑に等しいものとなりえた。**しかし、何がふさわしいかについての文化的な理想は、神学的と思われた優先事項のために、誰かによって捨て去られることもありえた。」[18]

「パウロはコリントの女性たちを正していたのだと、通常は疑問の余地なく想定されている。**しかしこの箇所は、コリントの女性たちが頭のかぶり物やヴェールを外すことを拒んでいたと想定するほうが、より筋が通る。**彼女たちは、権威ある人々、すなわち家の教会の男性たち、あるいはおそらく自分の夫たちからさえ、ヴェールを外すよう圧力をかけられ、あるいは促されていたのである。これは、ヴェールを着用する文化において繰り返し起こる種類の筋書きである。」[19]

ヴェールの着用は、社会的な違い、すなわち身分の上下を目に見えるものにしていました。この身分の違いは、1800年にわたって近代に至るまで見ることができます。「これは、そうした女性たちが性的に近づきうる存在であることを示しただけでなく、社会秩序と階級間の区別をも維持していた。〔…〕**すべての女性がヴェールを着用することをパウロが支持したことは、教会内の社会的関係を平等にした。このヴェール着用が彼の裁量のうちにあった限りにおいて、彼は、文化の中でその地位を拒まれていた教会の女性たちに、尊敬、名誉、性的な清さを保証したのである。**」[20]

「近東の文化では、上流階級の女性は献身と慎み深さを示すために頭を覆った。覆われた頭はまた、彼女自身の名誉と彼女の家族の名誉――とりわけ、彼女のアイデンティティの源であるパテルファミリアス（paterfamilias、古代の家の家長）の名誉――を直接示していた。パウロはこの象徴の複雑な意味を用いて、創造の記述に基づいてヴェール着用を支持する神学的論証を提示している。」[21]

エックハルト・J・シュナーベル（Eckhard J. Schnabel）はこう書いています。「女性が頭のかぶり物を着けることは（宗教的な文脈においてだけでなく）、ローマ・ヘレニズムの文化圏において自明の妥当性を持っていた。ローマの彫像、とりわけ皇族の女性たちの肖像や墓碑のレリーフは、既婚女性を、頭の上まで引き上げたストラ（パッラ palla）や、ウィッタ（vitta）すなわち毛織物の頭帯あるいは髪帯を着けた姿で描いている。これらは慎み深さと貞潔の象徴と見なされていた。女性は公の場でストラを着けなければならないわけではなかった。しかし、ストラを着けることは彼女の貞潔を象徴していた。アウグストゥスの婚姻立法は、売春婦が慎み深い妻、すなわちマトローナのストラを着用することを禁じると定めていた。」[22] アルミン・バウム（Armin Baum）は頭のかぶり物について次のように書いています。

古代において、女性の頭のかぶり物は何を意味していたのか？

コリント人への手紙第一11章5-6節の文化的背景を理解するには、少なくとも紀元前2千年紀までさかのぼらなければならない。アッシリア王ティグラト・ピレセル1世の治世（紀元前1115-1076年）の中期アッシリア法には、こうある。「市民が自分の囲い女（すなわち、結婚していない側女）にヴェールをかぶせようとするなら、仲間を5、6人座らせ、彼らの前で彼女にヴェールをかぶせて、『彼女は私の妻だ』と言わなければならない。そうすれば、彼女は（実際に）彼の妻である。」したがって、結婚の際には妻の頭が布で覆われたのである。覆われた頭は、妻であることの目に見えるしるしであった。

この慣習は何世紀にもわたって保たれた。パウロがコリント人への手紙第一を書いた新約聖書の時代にも、それは非常に広く行われていた。結局のところ、古代の妻の頭の覆いは、花嫁が教会の結婚式で着ける現代の花嫁のヴェールの先駆けでさえある。何千年も前から、女性は結婚のとき、文字どおり「頭を覆われて」嫁いできた。頭のかぶり物は、その無数の形の中で常に同じもの、すなわち妻の新しい身分を象徴しているのである。

ユダヤ教では、頭のかぶり物を外すことは、夫婦の貞節が疑わしいことを意味しました。姦淫を犯した女性は、頭のかぶり物を力ずくで取り去られることさえありました。自ら進んで頭のかぶり物をやめることは、男性たちに身をゆだねるつもりがあるという合図でした。

女性たちはどこで頭のかぶり物を着けるべきだったのでしょうか。礼拝の中で声に出して参加するとき、つまりその場にいる全員の注意が語っている人に向けられるときです。パウロによれば、すべての人が参加することができ、また参加すべきでした。だからといって、女性たちが礼拝の間いつも頭を覆っていたと考えなければならないのでしょうか。それは十分ありうることですが、私たちにはわかりません。この箇所でパウロの言葉を文字どおりに受け取るなら、彼女たちが頭を覆ったのは、礼拝の中で声を上げるときだけでした。

「この研究は、ヴェールは夫への女性の服従を象徴していたという、聖書学で支配的な想定を論駁するものである。ヴェールの着用は私的な象徴ではなく、法と慣習によって規定された公の慣

行であり、男性も女性もその慣習に従うことが期待されていた。**要するに、ヴェールは女性の名誉、地位、保護を表していたのである。**」[23]

「女性たちがヴェールを外すことを拒むのは、ヴェールが名誉と保護を象徴しているからであり、それは一般的なことであった（そして今もそうである）。むしろ、公の場でヴェールをかぶることを許されていなかった女性たちが、キリストによって義とされたことを象徴するために、集会でヴェールをかぶりたいと願った可能性のほうが高い。すべての女性にヴェールをかぶるよう命じたパウロの指示は、反文化的あるいは対抗文化的であり、女性たちに対して好意的なものであった。すべての女性がヴェールを着用するという慣行は、キリスト教共同体における社会的関係を平準化したのである。」[24]

男性が宗教的な行為の際に頭を覆っていたことは、ローマ人についてはよく証言されていますが、ギリシア人については部分的にしか証言されていません。考察や注解において目を引くのは、男性の頭のかぶり物にははるかに少ない注意しか払われていないことです。

コリントで神殿の犠牲を執り行うカエサル・アウグストゥス（Caesar Augustus）の像は、この支配者を、頭を覆うヴェールをかぶった姿で表しています。リチャード・オスター（Richard Oster）は、ギリシア人男性が異教の神々への宗教的な犠牲の際にしばしば頭を覆っていたと説明しています。パウロは、異教の偶像礼拝におけるコリントの人々の以前の慣行について論評していた可能性が高いでしょう。キプリアヌス（Cyprian）は三世紀になってもなおこれについて論評しています。『あなたがたの頭は、犠牲を献げた者たちの捕らわれた頭がそこで覆われていた、あの不敬虔で冒涜的なヴェールから自由なままであった』（De lapsis 2）。ブライアン・ロズナー（Brian Rosner）は、パウロがコリント人への手紙第一6章12-20節で、聖なる催しの際に性的行為を行っていた男性たちについて憂慮していたことを説得力をもって示しています。したがって、男性の頭のかぶり物についてのパウロの憂慮は、神殿娼婦との性的行為に対する叱責でもあったのかもしれません。とはいえパウロは4節でこのテーマに詳しく立ち入ってはおらず、このことは、彼がこの状況を女性たちとの対比としてのみ用いたことを示唆しています。

本文解釈のための指針といくつかの側面

この文章を読んでいる方々のほとんどは、このパウロの箇所を初めて読むわけではないでしょう。そのような方々のために、この箇所への新しい接近の道を開くかもしれないいくつかの側面を以下に挙げます。これらの側面は、この箇所とそれに関する研究に繰り返し取り組んだ結果であって、単に天から降ってきたものではありません。これらは、女性の階層的な服従という眼鏡を通してこの箇所を理解する、なじみの読み方に陥らないための助けになるでしょう。すでに述べたように、それはこの箇所のテーマではないのです。

- この箇所は何よりも、すべてがどのように神の栄光のためになされるべきかに重きを置いています。
- 問題になっているのは、男性と女性が、注意が自分たちに向けられないようにふるまい、装うことによって、礼拝において神の栄光を際立たせることです。

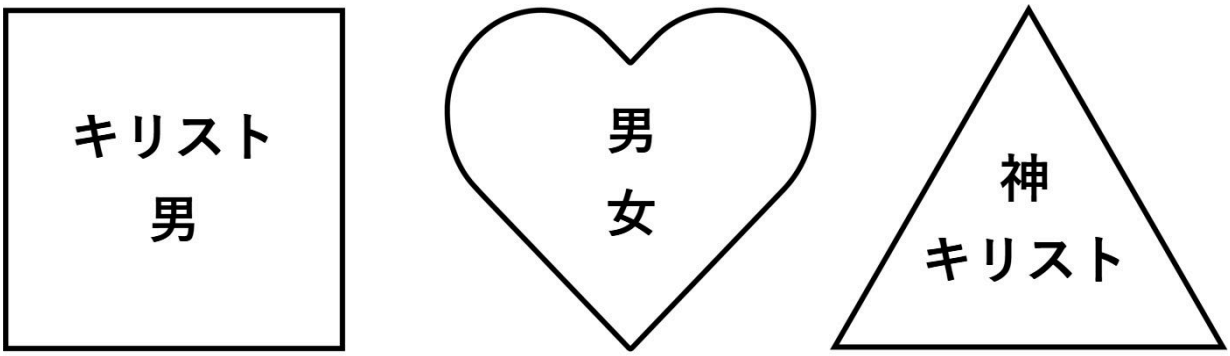
- （一部の）男性たちが、女性たちに頭のかぶり物をやめるよう要求したことによって、パウロの教えの原因ときっかけとなりました。[25]
- 文化的・社会的な習慣や風習が取り上げられています。恥や不名誉は、宗教的あるいは神学的な意味でのものではなく、社会の感覚におけるものです。
- したがって、パウロが論証の中で創造の物語を引き合いに出していても、問題になっているのは時代を超えたパウロの戒めではありません。
- キリストにある自由は、周囲の人々につまずきを与えないこととの間で緊張関係にあります。
- 問題になっているのは髪を覆うこと（単に頭を覆うことではない）であり、全身をヴェールで覆うことでもありません。
- 男性が女性の上に立つ階層的な創造の秩序は、どこにも問題になっていません。女性の男性への服従も、どこにも問題になっていません。両者とも祈り、預言的に語るのであり、同等の地位にあり、平等な立場にあります。
- パウロは結局のところ、既婚女性だけでなく、すべての女性について語っています。彼は、創造に根拠を持ち、女性が女奴隷であって、形式上かしらとなる夫や父や後見人を持たない場合にも当てはまる、男性と女性のより一般的な関係に焦点を当て続けています。
- 衣服や髪型のような外面的なことは、福音によって定められてはいません。それらは旧い契約の祭儀においては本質的なものですが、コリントの人々が主の晩餐において祝っていた新しい契約においてはそうではありません。
- 21世紀の男性と女性のための行動規則が問題になっているのではありません。

以下、この箇所の一節一節を取り上げていきます。

コリント人への手紙第一 11章3-16節[26]

> 3 しかし、あなたがたに知っておいてほしいのです。
> キリストがすべての男のかしらであり、
> 女のかしらは男であり、
> キリストのかしらは神であることを。

パウロは、最終的に頭のかぶり物のテーマについて語るために、三つの組み合わせを挙げています。これは、神、次にキリスト、その下に男、そして最後に女という段階や序列のことではありません。命令系統ではないのです。最後に来るのは女ではなく、すべてのものの出どころである神です（12節）。三つの組み合わせは、類比として**並んで**置かれています。救いの秩序が問題になっているのではありません。女性とキリストとの関係は、男性（あるいは彼女の夫）とキリストとの関係と何ら異なるところがありません。[27]



かしら（Haupt）という語は、ドイツ語の用法では比喩的な意味において、たとえば「ハウプトマン」（Hauptmann、隊長）のように、ただちに権威ある人物という解釈に結びつきます。ほとんどすべての注解者もそのように理解しています。ある翻訳はかしらという語さえ用いず、すぐに服従として訳出しています。NeÜ（ドイツ語聖書翻訳）はすぐさま「首長」（**Oberhaupt**）という語を用い、パウロが女性の頭のかぶり物を根拠づけるためにその論証を何に基づかせているとされるのかについて、まったく疑いの余地を残しません。「ほとんどの学者は、コリント人への手紙第一11章3-16節のテーマは男性の権威と女性の服従であると想定してきた。その理由の一つは、ラテン語、英語、ドイツ語において『かしら』が権威の比喩であるため、この箇所の解釈の歴史において『権威』という意味が自明のことのように思われてきたからである。」[28]

この箇所全体ではそもそも権威と服従の問題は扱われていないのですから、かしらの比喩的な意味が何であるかを明らかにする必要があります。予想されるとおり、これについては階層を支持する人々と平等を支持する人々が激しい論争を繰り広げてきました。**いずれにせよこの箇所は、かしらの意味を源泉・起源とすることを支持しています（8, 12節）。**

「ウェストフォール（Westfall）は、文脈の中での創世記1-2章への暗示が、ギリシア語における『かしら』の比喩的意味のありうる多様性と幅を限定し、それが命の源を指すようにしていると論じている。そのため、次のように言い換えることができる。**『しかし、あなたがたに認識してほしいのです。すべての男の命はキリストから来ており、女の命は男から来ており、キリストの命は神から来ているということを。』**」[29] …「男は女の命の起源であるから、彼は女のかしらである。男が女のかしらであり、二人が一体であるなら、パウロは、女は男のからだであると結論する。パウロは『かしら』という比喩を、結婚に、男と女に、キリストと教会の関係に、そしてキリストと父なる神との関係に適用するにあたって活用することができる。彼は『かしら』を用いて、これらの関係を互いに解釈しているのである。」[30]

「κεφαλή（かしら、または頭）の意味の範囲には、人間や動物の頭が含まれ、それがアイデンティティ、源泉、命、そして養いを含む比喩へと拡張された。慣用的なギリシア語（言語用法）においては、それは『権威』を意味しなかった。このことは、Liddell and Scott's Greek-English Lexicon におけるその項目から明らかである。」[31] …「このようにパウロはκεφαλήを用いている。**家族関係の文脈において、命とアイデンティティの起源あるいは源泉を指すために**――夫と妻、家族としての教会、そして父なる神とその御子イエス・キリストである。」[32]

「人類とアダムとの関係は、神学者たちによって『**かしらであること**（Hauptschaft）』、『自然的かしら』、あるいは『契約のかしら』と呼ばれている。」…「アダムが人類のかしらであるのは、彼が生物学的な命の源泉だからである。それゆえアダムには、人類に先立つ、あるいは人類の上に立つ優位、名誉、権威、崇敬は与えられていない。**むしろそれは、起源から生じるアイデンティティに基づく関係であり**、パウロはそれを否定的に評価している。イエスはアダムに代わってかしらとなる。**なぜならイエスは教会を満たす霊的ないのちを与える源泉であり、教会は彼と有機的な一体をなしているからである（エペソ1:22; 4:15-16、コロサイ1:18）。**」[33]

「キリストが人間のかしらであることが、彼らの命・存在の源泉として理解されるなら、三つの組み合わせの間の類比は並行的なものとなり、それを探究することはパウロ神学の理解に豊かに寄与する。」…「同様に、男と女の関係、そして夫と妻の関係についてのパウロの説明は、アダムの自然的・生物学的なかしらであることについての歴史的理解と整合的に解釈することができる。**それは家族的な関係なのである。**」[34] …「**ギリシア文化において、始祖がかしらであるという概念は、家族の代表とアイデンティティを含んでいた。**」[35]

「最後に、『かしら』の三つの連想のうちの最後のものは、同義語としてのその用法にとって重要である。**アンソニー・ティーセルトン（Anthony Thiselton）は、解剖学的な頭はからだ全体をも代表していたと説明している。誰かが自分の物理的な頭を辱めるなら、その人全体が汚された。パウロは、人の外見が他者と自分自身に跳ね返ってくることに注目していた。**したがって、『かしら』という語の繰り返しの使用は、階層的な地位を示したり、男女の間に違いを作り出したりするためのものではなかった。むしろそれは、性的な儀礼に深く関わっていた異教の宗教とのつながりを避けるために、コリントの祭儀的な行為を変えることに役立つ詩的な技巧だったのである。」

当時の用法における比喩的な意味内容には、ある程度の幅があります。かしらは、一体性、アイデンティティ、起源を表すと同時に、人の最高の名声をも表します。全体として、それは男と女がどのように結びつき、互いに向き合っているのか、そして人がどのようにかしらに属しているのかを示しています。

同等の地位にありながらも、彼らが生きている文化に応じて、外面的なふるまいには違いがあります。役割が区別されているのではありません。コリント人への手紙第一11章では、むしろ役割はまさに同じなのです。両者とも祈り、預言するのですから。しかしその中で外見には違いがあり、それは当時の文化に根拠を持っています。パウロはこうした文化的な状況を取り上げ、それを創造の思想と結びつけることさえできるのです。

> 4 祈りまたは預言をするとき、頭に何かをかぶっている男はみな、自分のかしらを辱めます。

祈ることと預言すること、すなわち預言的に語ることは、礼拝の集会の構成要素です。集会における神の臨在は、神に向かって語ること、つまり願いと礼拝においても、また集まった教会に向かって神が語られることにおいても現れます。キリストのからだのすべての肢体は、男性も女性も、その両方を行うように召されています。

男性は、祈り、預言するとき、頭の上に何もかぶるべきではありません。**これはパウロによる確認であり、当時の（宗教的な）文化を参照しなければ解明できない言明です。私は他の人々と同様に何年もの間、その根拠を直接の文脈の中に、次に手紙全体の中に、さらに新約聖書全体の中に、そして最後に旧約聖書の中に探し求めました。しかし、意味のある、納得のいく結果は得られませんでした。**

ローマ人は宗教的な行為の際に頭を覆いましたが、ギリシア人はたいていそうしませんでした（キーナー（Keener））。今やイエスを告白する男性たちは、コリントやその他の場所の偶像礼拝で行われていた慣行やふるまいから距離を置くのです。

「（男性は）恥ずべきふるまいをしている。祈りにおいて、イエス・キリストの栄誉よりも自分自身の個人的な威信を気にかけているからである。キリストに関して言えば、この言明は、社会の上流階層に属し、祈るときに自分の高い地位をこれ見よがしに誇示するイエスの告白者たちは、キリストではなく自分自身をあがめているがゆえに、キリストに恥をもたらすということを意味している（7-8節で三度繰り返されるδόξα〔名誉、栄光〕という語を参照）。[36] …彼らは、すべてのものの出どころであり（12節）、祈りの中で呼び求められる（13節）神へとその場にいる人々の注意を向けるのではなく、注意を自分自身へと引き寄せている。**ローマ社会では、たまたまトガを頭の上まで引き上げていた場合、頭を覆いから出すことは、尊敬に値する人々がその場にいることを示した**（プルタルコス（Plutarch）, Mor 266）。」[37]

「**この文脈において、男性は（頭のかぶり物なしで）飾らない神のかたちとして神の前に現れることによって自分のへりくだりを示し、女性は公の場と礼拝において自分の栄光・美しさを控えることによって、神と自分自身と自分の家族に敬意を示すのである。**」[38] というのも、女性はその反対のことをするからです。すなわち、頭を覆うのです。

男性はどのかしらを辱めるのでしょうか。まず第一に、それは自分自身のかしらです。彼は、自分のかしら、すなわち頭が表している人格としての自分自身を辱めます。そして彼は、自分のかしらであるキリストを辱めます。なぜなら彼は、頭のかぶり物によって（意識的にか無意識にか）、神の御前では自分にふさわしくない栄誉を自分自身に与えているからです。

> 5 しかし、頭を覆わずに祈りまたは預言をする女はみな、自分のかしらを辱めます。
>
> それは髪を剃られているのとまったく同じことだからです。

「男性は、祈り、預言するとき、トガを頭の上まで引き上げるというローマのエリート的伝統を捨てるべきである。しかし女性は、常に頭のかぶり物を着けてのみ祈り、預言するべきである。『覆いのない頭で』という言い回しは、女性の特定の髪型を描写しているのではなく、布製の頭のかぶり物、具体的には頭の上まで引き上げたストラ（パッラ palla）を指している。」[39]

「パウロの論証はこの理解を支持している。彼は、覆われていない頭は女性にとって恥であり、それは頭を剃られることに似ていて、彼女の評判を損ない、したがって彼女の価値を下げると述べているからである（コリント第一11:5-6）。覆われていない頭のこの意味は、ローマ法にも共有されていた。ローマ法は、女性がマトローナのような装い（ヴェールの着用や髪を結うことを含

む）をしておらず、男性が彼女を誘惑したり悩ませたりしようとした場合、その男性は傷害の罪に問われることはないと定めていたのである。」[40]

「パウロが批判しているのは、教会の集会で頭の上までストラを引き上げずに姿を現すことによって、意識的にか無意識にか、自分は『身をゆだねる用意がある』という非言語的な合図を発していたコリントの女性たちである。しかし教会の礼拝の集会は、女性たちが合図を発し、男性たちから『品定めされる対象』となる場所ではない。問題は女性の祈りと預言であって、公の場への登場ではないという反論に対しては、パウロの視点から次のように答えることができる。すなわち、彼は教会の集会をまさに公の空間として、外部の人々が招かれ、その場にいる空間として理解しているのである。」[41]

すでに述べたように、シュナーベルとは異なり、ウェストフォールは、女性たちの頭のかぶり物を取り除こうとしたのは男性たちであったと見ています。その動機が何であれ、福音の自由であれ、あるいは否定的に言えば潜在的な性的動機であれです。**したがってパウロは、女性たちに頭のかぶり物をやめるよう要求した男性たちに、その要求が突き詰めれば一人の女性にとって何を意味するのかを、まざまざと見せつけているのです。**髪を剃られた女性は、姦婦あるいは売春婦として、あらゆる恥を身に負いました。「パウロは、礼拝における女性たちの公の姿を、さらし者にされ罰せられた姦婦――その地位は売春婦の『名声』に等しかった――の社会的烙印と同一視している。」[42]

> 6 もし女が覆われていないのなら、髪も切ってしまいなさい。しかし、髪を切られたり剃られたりすることが女にとって恥ずべきことであるなら、覆いなさい。

覆わないというこの要求の帰結は、女性たちにとって最後まで考え抜かれなければならないものなので、パウロは、男性たちに従って頭を覆わない女性たちにとって、社会的文脈の中で破滅的となる結果を繰り返し述べます。「パウロは、この皮肉を込めた勧告がコリントの人々に論証として理解されることを前提にすることができる。」[43]

「髪を切らせた女性、あるいは剃り上げられた女性の姿は『恥ずべきもの』である。なぜならその姿は、姦淫の罪を立証された女性の降格を思い起こさせるからである。姦婦として公にさらされ、剃られた髪によって誰からもそれと見分けられることは恥である。パウロの見解によれば、女性が頭のかぶり物なしに教会に姿を現すとき、まさにこの恥が認められるのである。女性が公の辱めを避けたいのであれば、**彼女は身を覆うべきである。**」[44]

頭のかぶり物をやめるというこの要求の帰結は、文化的文脈においては明白です。しかしパウロは、頭のかぶり物を支持するために、次の節からすぐに、創造の出来事に基づく神学的な根拠づけも持ち出します。**ここですでに指摘しておくことが非常に重要だと私は考えます。これらの根拠づけは時代を超えたものではありません。それらは文化的な現象に関係しているのであって、その逆ではありません。つまりパウロは、性の問題についての神学を展開し、そこから頭のかぶり物の必要性を導き出しているのではないのです。もしそうであれば、頭のかぶり物は今日に至るまで、女性が礼拝で守らなければならない規範であることになるでしょう。**しかし21世紀の西洋世界において、頭のかぶり物はもはやテーマではなく、社会的な慣習でもありません。キリスト者

がそこから、自分たちの小さな隔絶した世界にとっての律法となる慣習を作り出すのは、恥ずかしいことです。

> 7 男は、確かに頭を覆うべきではありません。
>
> 彼は神のかたちであり、神の栄光だからです。
>
> しかし女は男の栄光です。

ここでパウロは、創造の記述から得られた認識と推論を持ち出します。**それらは、今日の女性と男性のふるまいではなく、当時の文化的なふるまいを根拠づけるものです**。引き続き、礼拝の集会が問題になっています。

パウロが、女性は神のかたちではないと言っているのではないことを確認しておくことが大切です。女性はまた男のかたちでもなく、男の栄光なのです（メデマ（Medema））。パウロの論証がここで特殊なのは、文化的な、つまり時代に拘束された慣習が問題になっているからです。並行関係から次のことが明らかになります。**両者とも神のかたちですが、女性は同時に男の栄光でもあるのです。**

「女は『土から出た男』のかたちを帯びていたが、実際には創造においてより高い秩序から形づくられた。アダムはすでに神の直接の行為によって形づくられ、命を吹き込まれていたからである。彼女は彼から造られた。**それゆえ、女は男の栄光、あるいは栄光の栄光なのである。**しかしこの『より多く』は、パウロの著作においても創造の記述においても、階層的なものとして描かれてはいない。階層（地とその他の被造物に対する人間の支配）は創世記1章27-28節で扱われているが、創世記2章では別のテーマが扱われている。」[45]

「パウロが、男は神のかたちと栄光のうちにあるが、女は（それとは対照的に）男の栄光であると述べているコリント人への手紙第一11章7節を、私たちはどのように理解できるだろうか。**その答えは、エバが、アダムとエバのすべての子孫と同じように、複数のアイデンティティを持っていたということである。彼女は神のかたちに造られたと同時に、アダムから直接造られたゆえにアダムの栄光でもあった。彼女は独特な仕方でアダムに似た者であり、彼の一部でさえあった。そのため二人は、切り離すことのできない仕方で一体であった。**それは子孫と親との関係とは異なるものであった（創世記2:23-24）。」[46]

「パウロが、男と女の違いにおける人間の本質について論評しているのではなく、頭のかぶり物の問題という文脈の中で、女は男の『照り返し』であると強調していることがわかれば、この言明は理解できるものとなる。女は男のδόξα（栄光）であるという言明は、『**女の神のかたちとしての質を低めるものではなく、したがって彼女の尊厳を貶めるものでもない。なぜならパウロは創世記2章から論じているのであり、それによれば女はまさに男の骨からの骨、肉からの肉であり、他のすべての生き物とは異なり、男と同等の者だからである**』。」[47]

上で述べたように、女はアダムのかたちを帯びており（コリント第一15:49）、キリストにあっては、人類の他の人々と同じように神のかたちと栄光をも帯びています。とはいえパウロは、男の姿は女の姿とは異なる仕方で神のかたちと栄光を示しているとも言っています。なぜなら、女の姿、すなわち美しさは男の栄光だからです（コリント第一11:7）。**パウロは、礼拝が男または女の**

どちらかをたたえたり、あがめたりすることにならないように、「男の栄光」（つまり彼の妻）は礼拝の間、覆われ、あるいは隠されるべきだと指摘しているのです。

「しかし外見に関して言えば、男性の栄光と女性の栄光の間には違いがある。文化と一致して、パウロは、神が女性をより魅力的に、あるいはより栄光ある者として造られたので、女性は男性の栄光であると信じていた。」[48]

> 8 なぜなら、男が女から出たのではなく、女が男から出たのだからです。

女はどのようにして男の栄光となったのでしょうか。男はどのようにして女のかしら、つまり女の起源となったのでしょうか。女は男から、男のわき腹から造られたのです。

「それゆえ、創造の記述の引用は超越的な規範を指し示しているはずだという想定はすべて、問題をはらんだ先入観である。イエスもパウロも、人類が男と女として創造されたという聖書の記述は性についての超越的な規範を伝えていると信じていた。しかし**パウロは、コリント人への手紙第一11章3-16節においてヴェール着用についての自らの論証を支えるためにもそれを引用したのであり、それは文化に拘束された適用である。超越的な規範や普遍的な原則は規範的あるいは普遍的な結論を支持するためにしか用いることができないと主張するのは、論理的な誤謬である。**」[49]

問題になっているのは男と女の本質や機能ではなく、9節が示すように、社会という文脈における両者の互いへの関係づけです。[50]

> 9 また、男は女のために造られたのではなく、
>
> 女が男のために造られたのです。

「パウロは、女が創造に基づいて男へと関係づけられていることを強調している。これが価値を貶めることを意味せず、軽んじる意図でもないことは、δ ι ά＋対格という表現からではなく、男と女の本質や質が問題になっていない文脈における論証の流れから、そして11-12節から明らかになる。**ローマ・ヘレニズム社会では妻がしばしば夫よりかなり若かったという事実は、パウロが聖書の創造の物語から展開している、時間的な先行性と男女の機能的な関係づけという論証を、コリントの女性たちが理解する助けとなった。**」[51]

しかし、「女は男のために造られた」（11:9）の意味の解釈を考え直すことに寄与する三つの点があります。第一に、「女は男のために造られた」という主張は、「女は男の栄光である」という言明を裏付けています。第二に、この主張は創世記2章4-25節の創造の記述によって解釈されます。第三に、それは「女は自分の頭に対する権威を持つべきである」（10節）という結論の根拠を与えています。[52]

9節は、男に優先権があり、女は「単に」補完としての役割を果たすにすぎないという印象を与えます。しかし、ウェストフォール（Westfall）が強調しているように、エバの創造は、アダムが助けを必要としていたことのしるしなのです。それゆえ女には「強い」立場、自ら責任を負う立場が与えられています。そのことが、裏付けとして、今度は10節で表現されるのです！

> 10 それゆえ、女は御使いたちのために、頭の上に権威を持つべきです。

数えきれないほどの翻訳が、ここでギリシア語本文に「力あるいは権威のしるし」を付け加えています！ そこにあるのは、ただ力、全権、あるいは権威という語だけです。この付け加えは私には驚きではありません。冒頭で述べたように、このパウロの箇所は女性に対する男性の階層を裏付けるものとして理解されてきたのであり、それが翻訳に影響を与えてきたからです。言い換えれば、この付け加えは一つの解釈なのです。この節は、次のように訳すこともまったく同じようにできます――あるいはむしろ、そう訳さなければなりません。

それゆえ、女は御使いたちのゆえに、自分の頭に対する権威を持つべきです。

（シュナーベル（Schnabel）、ウェストフォール、ブッシュネル（Bushnell）、キーナー（Keener）、シルマッハー（Schirrmacher）など）

「抽象名詞として、『自分の頭に対する力（すなわち支配権）』、つまり自分自身に対する力という意味である。後者の意味は、a）抽象名詞として『力』（すなわち、他者の力を受動的に被るのではなく、自分が持っている力）を意味するἐξουσία（全権）という語の一般的な用法、b）この言い回しの構文、そしてc）論証の流れに合致する。[53]

パウロは、キリスト教共同体においてはヴェールをかぶることは女性の権利であると指摘しており、それによって象徴が変容しています。したがって、それは明確に、服従や階層的従属のしるしではありません。これは、パウロがすでにコリント人への手紙第一6章2-3節で述べているように、女性は世界と御使いたちをさばくように定められているのだから、女性の服装に関する事柄において自分自身の判断を下すことができるべきだ、ということを意味するのかもしれません。**「伝統的な頭のかぶり物を着けることによって、妻は夫への貞節と自分の個人的な社会的地位を受け入れることで、自分の頭に対する支配権を示す。女性たちが教会の集会という公の場で覆いを取ることによって発する性的な合図は避けられ、男と女の関係づけは保たれ、祈りと預言的な語りにおける女性による神の現実の表明は真正なものであり続ける。」**[54]

「したがって、パウロの起源の神学において、男と女は明確に相互に依存し合っている。コリント人への手紙第一11章3-16節の文脈において、パウロは、ヴェールを着用したいという女性たちの願いを自分が支持したことから生じうる、女性たちの不適切な独立性を外交的に和らげているのである。」[55]

どの御使いのことなのかという問いについて、シュナーベルは次のようにまとめています。「御使いについては、次のような解釈の可能性が提案されている。1. 黙示録2:1にあるような教会の指導者。2. コリントの教会における女性たちのふるまいにつまずく、他の教会からの使者。3. キリスト教会に関心を持ち、イエスの告白者たちの活動についての報告を得るためにクライアント（あるいは奴隷）を教会の集会に送り込む、信仰を持たない市民たちの使者。4. 復活祭の朝に女性たちにイエスの復活の知らせを告げた御使いたち。5. イザヤ6:2によれば、神の御座の前で翼をもって顔と足を覆っている御使いたち。6. 創世記6:1-4の堕落した御使いたちで、頭を覆わずに祈る女性たちがその犠牲となる者たち。7. 信者たちがさばきの座に着くことになる御使いたち（6:3参

照)。8. 礼拝に臨在し、神を代表し、祈りと預言を仲介する善い御使いたち。三番目の解釈と最後の二つの解釈が最も説得力がある。」[56]

私はウェストフォールと同様に第7点に同意します。御使いたちへのさばきは、女性を含む信者たちのきわめて高い地位を示唆しており、その地位には成熟と霊的な判断力と知恵が伴っていなければならないからです。

> 11 それでも、女は男なしにあるのではなく、
>
> 男も女なしにあるのではありません、
>
> 主にあっては。

頭のかぶり物の問題において女性たちが自立し、自ら責任を負うとしても、彼女たちは、結婚においても教会においても、既婚者も未婚者も、男性たちと結びついたままです。パウロは、これ以上的確には言い表せないほどに、相互の依存を強調しています。そしてそれは創造の出来事にもかなっています。8節と9節から、結婚であれ家族であれ教会であれ、女性は奴隷のようなもの、劣ったもの、支配されるべき者、導かれるべき者だと結論づける人がいるなら、その人は間違っています。パウロは予防線を張り、妥協することなく男女の平等を強調しています。**「主にあって」は新しい創造の存在を言い表しており、それは、このような尊厳の平等と立場の平等が存在しなかった当時の文化から際立って区別されるものなのです！**

「女は劣った者ではなく、『主にあって』男と女は同等の権利をもって互いを必要としている。しかしΠλήν は常に逆接の意味を持つわけではない。パウロにおいては『ただ、いずれにせよ』という意味があり、それは『議論を締めくくり、本質的なことを際立たせる』ものである。パウロはこう書いている。**しかし主にあっては、女も男なしには（何ものでも）なく、男も女なしには（何ものでも）ない。**翻訳では冒頭に置かれている『主にあって』という言い回しは、ギリシア語本文では文の終わりに、つまり強調された位置に置かれている。パウロは、男と女が互いに関係し合っていることを強調している。**『女は男なしには何ものでもない』という文は、ヘレニズム・ローマ社会においては、『新しい女性』の考え方を別にすれば（5節についての箇所を参照）、さほど驚くべきものではない。驚くべきなのは『男は女なしには何ものでもない』という文である。並行して表現されたこの文は、イエス・キリストにおける神の救いの御業の結果としての、男と女の同等の地位を強調している。**」[57]

> 12 女が男から出たように、
>
> 男もまた女によって存在するのです。
>
> しかし、すべては神から出ています。

パウロは11節の論証を深め、8節とまったく同じように考えを進めています。女、すなわちエバはアダムから造られました。アダムがいなければエバは存在しなかったでしょう。一回限りの出来事であり、まさに文字どおりの「キックオフ」です。それ以来、すべての男は繰り返し女から生まれてきます。

ここから誰も自分のための優位や優先権を導き出すことはできません。誰もが神から贈られた自分の価値を持っています。すべては創造主であり、かしらである神から出ているからです。

> 13 あなたがた自身の間で判断しなさい。女が覆いをかぶらずに神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。

パウロは霊的な識別力に挑戦しています。彼はコリントの男性たちに語りかけ、切実に問いかけています。もし彼らが女性たち、あるいは一部の女性たちに頭を覆わないよう要求するなら、彼らは頭のかぶり物に結びついていた本質的な要素を忘れているのです。

「彼は、すべての女性が、祈り、預言するときには髪を覆うことを望んでいると論じている。文化の中でヴェールをかぶることを許されていない者たち、たとえば女奴隷たちも含めてである。」[58]

「13節でパウロは、ふさわしさをもって論じている。それはコリントのキリスト者たちを納得させるはずの論証である。**女が覆いをかぶらずに神に祈るのはふさわしいことだろうか。**もしτοˋπρέπονという表現がヘレニズムにおいて、τοˋδίκαιον、τοˋκαλόν、τοˋἀγαθόνと同様に『社会生活は豊かな徳を求めるがゆえに、生活全体を包む』という意味を持っているなら、それは服装の規定の問題をも含んでいる。」[59]

「πρέπονἐστίν（ふさわしい、礼にかなう）という言い回しは、同時代の文書において、人が既存の規範に従ってふるまうことへの期待を指し示している。それはローマ文化の根本的な範疇であり、とりわけ、服装規定に至るまでふるまいが規制されていたアウグストゥスの婚姻立法の結果でもあった。コリントの人々は社会の規範と期待を知っていたので、パウロは、彼らがこの問いに『はい』と答えることを期待している。」[60]「問題になっているのは、正しい祈り方を規定する慣習ではなく、社会において通用し、コリントの人々に知られており、『主にある』新しい存在によっても廃棄されていない、ふさわしさの規範である。」[61]

「ヴェール着用の戒めは、女性に対する論難としても、女性の男性への服従としても理解されるべきではない。なぜならヴェールは女性の保護であり、ギリシア・ローマ文化において女性が持ちえた地位と名誉のしるしだったからである。」[62]

繰り返し確認しておきます。パウロが期待している答えは、神学的にではなく、社会的・文化的に根拠づけられています。人は、まさにつまずきとならないために、周囲に合わせるのです。

> 14 自然そのものも、あなたがたに教えていないでしょうか。男が長い髪をしていれば、それは彼にとって不名誉（恥）であり、

「まずパウロは再び男について語る。**自然そのものも、男が長い髪をしているなら、それは彼にとって恥であることを、あなたがたに教えていないだろうか。**パウロはここでも、この問いに当然『はい』と答えられることを期待している。『自然』（φύσις）という表現は、男と女の性質や男と女の外見を含む、認められた自然の秩序を指している。パウロはもちろん、『自然』が男の髪を短く伸ばすようにしている、と言いたいのではない。『恥』（ἀτιμία）への言及は、13節のπρέπονと同様に、物事の自然な秩序において規範として認められた慣行を言い表して

いる。自然に訴える場合、人々は全面的な同意を期待した。国家とその行政の最高位の代表者たちでさえ、物事の自然をもって論じたのであり、『それがこの種の論証に最高の権威を与えた』のである。」[63]

「コリントに住んでいた成人男性は、長い髪ではなく短い髪をしていた。長い髪は男らしさの否定を示し、しばしば受動的な同性愛的傾向の疑いを招いた。それはローマ社会で社会的な烙印を押されていた。パウロはコリントのキリスト者たちに、教会の男性の肢体たちは通常どおり短い髪をしているべきであることを思い起こさせている。」[64]

自然が教える？ 自然がイエスの弟子にとっての教師なのでしょうか。決してそうではありません。教師は聖霊であって、罪によって侵され損なわれた自然ではないからです。いいえ、シュナーベルが書いているように、問題になっているのは社会の確立した秩序、つまり長い期間にわたって人々がそのようにしてきて、それによって文化となったものなのです。現代からふさわしい比較を見つけるのは困難です。今日では髪型や服装に関して何でも可能だからです。絶対的な真理があってはならない私たちのポストモダンの時代は、絶対的な個人主義に特徴づけられています。

この論証における自然とは、古代という時代に人々によって多かれ少なかれ受け入れられ、生きられていた主観的な秩序です。不名誉――あるいはもっと鋭く訳せば恥――とは、神の前でのことではなく、コリントの人々の前での、人々にとってのことです。ナジル人の、あるいはアブサロムやサムソンの、パウロの、そしておそらくイエスの長い髪は、神の前で恥ではありません。恥はつまずきと対応しており、キリスト者は、イエスに従う者として可能な限り、福音のためにそれを避けるべきだったのです。

すでに何世紀も前に形成され定着していた生理学的な理解について、ごく簡単に触れておきます。この理解によれば、男の精子は頭の中で形成され、そこから来るとされていました。長い髪は精子の流れを妨げたり、押しとどめたりし、生殖を損なうと考えられていたのです。

> 15 女が長い髪をしていれば、それは彼女にとって栄誉であるということを。髪はヴェールの代わりに彼女に与えられているのですから。

では、「自然」は女性とその髪型あるいは性質について何を教えているのでしょうか。

「女性にとって慣習は異なる。**女が長い髪をしているなら、それは彼女にとって栄誉（である）ことを、自然はあなたがたに教えていないだろうか。**女性たちは髪を長くしていた。彫刻は常に長い髪の女性を表している。特に裕福な女性たちの間では、長く伸ばした髪が技巧を凝らして結い上げられていた。」[65]

古代において、女性の髪は通常、欲望の対象と見なされていました（キーナー）。それを覆わない女性は――そう解釈されたのですが――欲望をかき立てようとしているのでした。上流階級の女性たちは、手の込んだ編み髪と、そこに着けた装飾品を見せびらかすために、ときにこれを無視しました。コリントの教会では、他の場所と同様に、さまざまな文化が出会っていました。

「パウロが栄光を女性とその髪に適用している仕方からすると、彼は**女性は視覚的に栄光の栄光である――つまり女性はより大きな栄光を持っている――と信じているように思われる。女性が**

男性のために造られたという事実（コリント第一11:9）は、彼女のより大きな美しさと男性に対する魅力の目的を指し示している。それはまた、伴侶、パートナーとしてエバを必要としていたのはアダムであったことをも示している。彼女の創造によって益を受けたのは彼であって、その逆ではない。」[66]

「むしろパウロの論証は、栄誉が神に向けられるように、女性の『かしら』は礼拝において覆われていなければならない、というものである。『かしら』の比喩はこの論証にとって本質的である。男は女のかしら（文字どおりに）であり、女のかしらは何よりもまず夫の栄光であり、そして彼女の頭の上の髪は彼女の栄光であり、また夫の栄光でもある。」[67]

「女性の美しさは嫉妬をかき立てると同時に、夫の地位を示すものであり、それは礼拝において神の栄誉と直接競合することになるだろう。**問題になっているのは神の栄誉と栄光であって、家の教会の男性たちの栄誉と栄光でもなければ、祈り預言する女性たちの栄光と美しさでもない。」**[68]

「確かにこれはパウロの論証の出発点であり、彼はパテルファミリアスに対する女性の関係についての文化的な理想を追認しているように見える。しかし彼の論証の展開は、実際には男性と女性の関係を平等にし、それぞれの価値を確定し、その起源の相互性を際立たせている。すなわち、女は男から出たが、男もまた女から出たのである。**彼の焦点と関心は、妻に対する夫の権威や支配を追認したり強化したりすることではなく、神があがめられることを確かにすることなのである。」**[69]

「女は男の栄光であり、彼女の髪は彼女の栄光である。それゆえ彼女は礼拝においてそれを覆うべきである。パウロは、髪は女性の栄光であると言う。それは彼女の外套・覆いだからである（コリント第一11:15）。**これは、女性の髪が、彼女の外見を引き立てる美の装身具（肩掛けやヴェールのようなもの）のように機能することを意味している。**ヴェールを着用する文化は、貞淑な女性の髪は夫が眺め楽しむために取っておかれるべきであり、それゆえ公の場で見られるべきではないと信じている。」

> 16 しかし、もし誰かが論争好きであろうと思うなら、そのような習慣は私たちにはなく、神の諸教会にもありません。

コリントには、さまざまなことをめぐる争いが十分すぎるほどありました。そのうえ頭のかぶり物をめぐってまで、さらなる争いが燃え上がるべきではありませんでした。礼拝に参加する際に男性が頭を覆ったり、女性が覆わなかったりする慣習はあってはならず、明らかに他のどこでも知られておらず、一般的でもありませんでした。これは、何でも疑問視するコリントの懐疑的な人々に対する最後の論証です。（ローマ帝国の）すべてのキリスト者とすべての教会は、パウロが述べたとおりに実践している。男性はかぶり物なしで、女性は頭のかぶり物を着けて、集会で祈っているのだ、と。

「パウロは16節後半（『**私たちにはそのような慣習はなく、神の諸教会にもない**』）で、このような習慣を正当化しうる使徒的伝統は存在しないという指摘をもって締めくくっている。そして彼は、神の諸教会（αἱ ἐκ κ λ η σ ί α ι τ ο ῦ θ ε ο ῦ）のどれにも、このふるまいの類例はない

ことを指摘している。Chr. ヴォルフ（Chr. Wolff）は次のように注解している。『もしコリントの人々が自分たちの新しいやり方に固執するなら、彼らは神の権威のもとにある他の救いの共同体との交わりから離脱することになるだろう』。」[70]

今日における意義

神の言葉は時代を超えています。一言も過ぎ去ることはありません。しかし、特定の時代に属し、その時代に向けられた事柄もあるのです。

頭を覆うことによって、女性たちは、自分に注意を引きつけることや、自分の髪の栄光を見せること、そして男性たち（そしておそらく一部の女性たち）の気を散らすことを避けるべきでした。神の栄光が高められ、たたえられ、賛美されるべきだったのです。神の栄光、神の臨在こそが集会の中心でした。今日でも、礼拝において人間を高めるものは何もあってはならず、誰も自分に注意や栄誉を引きつけるべきではありません。

女性は、その外見によって、すなわち生まれ持った美しさや着飾った美しさによって、神の栄誉から何かを奪い取るべきではありません。**これがこの箇所の倫理的な原則であり、それは今日も有効です。講演者も説教者も、証しや宣教報告をする人も、歌い手も、楽器の奏者も、誰一人として――当時と同じように今日も――服装によって自分に注意を引きつけるべきではありません。**

「頭のかぶり物の慣行について言えば、西洋社会では、女性が貞節な妻としての自分の地位を頭のかぶり物によって示すことは、もうずっと以前から一般的ではなくなっている〔イスラーム諸国、したがってイスラーム地域の教会では事情が異なる！――HJR〕。そのような状況でキリスト者の妻たちが頭のかぶり物なしに教会で活動するのは、まさに彼女たちが自分の住む町の公の場でも頭のかぶり物なしに行動しているからである。**頭のかぶり物がないことは、何の合図も発していない。もし一部のキリスト者が、妻たちは『聖書への従順』から今日でもなお頭のかぶり物を着けるべきだと要求するなら、そのとき使徒パウロの指示はまさに『従順に』理解され実行されているのではない。パウロにとって問題なのは頭のかぶり物ではなく、社会全体にとって重要かつ基本的である伝統的な慣習を意図的に無視し、嘲ることなのである。**西ヨーロッパの教会で女性たちが頭のかぶり物を着けるなら、それはパウロが求めた、妻の貞潔と連帯を象徴する慣習への同調ではなく、むしろまさに同調していないふるまいである――西洋では、夫婦の連帯と慎み深さが特定の服装の仕方によって象徴されることはもはやほとんどない。それはむしろ言葉によって、すなわち結婚と配偶者の価値についての具体的な発言によってなされる。」[71] そしてもちろん結婚指輪によってです。結婚指輪は、それを着けている人が確かな（結婚）関係の中に生きており、新しい関係に開かれているわけでも、性的な冒険を求めているわけでもないことを、見誤りようもなく示しています。結婚指輪がそれを防ぐのは限られた範囲でしかありませんが、大切なのはそのしるしなのです。

それにもかかわらず今日、女性に頭のかぶり物を命じる人――あるいは女性として自分自身にそれを課す人――は、私たちが召されている福音の自由をまだ理解していないのです。

以下に、コリント人への手紙第一11章3-16節の**説明的な自由訳（パラフレーズ）**を記します。私がこの箇所を手短に説明するとしたら、このようになるでしょう。

コリントの皆さん、あなたがたに自覚してほしいことがあります。それは、すべての男の起源、すなわちかしらは、キリスト、メシアだということです。キリストによって男は造られました。そして男として、あなたがたはキリストに属しています。そしてそのことは集会の中で見ることができるのです。

女のかしらは男です。女は男と一つになるために、男のわき腹から造られました。男がかしら、女がからだです。男は女の起源であり、女もまた男に属しています。そしてそのことは集会の中で目に見えるようになります。

この関係を私たちはキリストにおいても見ます。キリストのかしらは神です。神はキリストを生まれさせました。神と等しい御子をです。

コリントで、ある男が集会の中でキリストや神に声を出して祈ったり、預言的に語ったりするときに頭を覆っているなら、それは恥です。彼はキリストにではなく、自分自身に栄誉を帰しているのです。なぜなら偶像礼拝者たちは、偶像に犠牲を献げるとき頭を覆うからです。覆わないことで、男はへりくだりを示し、いと高き方、目に見えないキリストに栄誉を帰すのです。

女性の場合は、まさにその逆です。集会で祈り、預言的に語りながら頭を覆わない女性は、自分のかしらに恥をもたらします。彼女たちは自分自身と自分の夫、つまり自分のかしらを辱めるのです。なぜなら彼女たちは注意を自分に引きつけるからです。

もし誰かが、女性も男性と同じように頭を覆う必要はないと要求するなら、その人は最後まで考え抜いていません。あなたがたも知っているとおり、コリントでは頭を覆わない女性は髪を剃られた女性と見なされ、売春をしている女性や性的な出会いを求めている女性と同じに見られるのです。彼女がヴ

ェールをかぶらず、頭を覆わないのなら、論理的には髪も切ってしまうか、すっかり剃ってもらうべきだということになります。

わかっています。あなたがたはそんなことを意図しているのではありません！ しかし、あなたがたが生きている社会では、それが帰結となるのです！ ですから、あなたがたのところに来て、公の場で女性が頭を覆うという通常の慣習が拒まれているのを見る人々にとってつまずきとなる危険を冒してはなりません。

男性は集会の中で、神の御前で、ヴェールをかぶるべきではありません。なぜなら男は神のかたちであり、神の栄光の照り返しだからです。

女もまた神のかたちですが、それに加えて、男の栄光の照り返しでもあります。彼女の美しさは、彼女が一つとなっている夫の美しさなのです。

彼女はどのようにして男の栄光となりえたのでしょうか。確かに、男が女から造られたからではなく、女が男から、男のわき腹から形づくられたからです。

そして、彼女が男の栄光であるのは、男が女のために造られたからではなく、その逆だからです。女は男のために造られました。男はひとりであり、助けを必要としていたからです。そして女として、彼女は男にとって慕わしいほど美しかったのです。

女はそれほど大きな価値を持ち、男にとってそれほど大きな益となる存在なのですから、自分の頭については自分で決めるべきです。頭を覆うか覆わないかをです。誰も彼女にそれを命じてはなりません。夫も教会の指導者たちも、頭のかぶり物を着けないよう彼女に命じてはならないのです。

しかし女は、その自立と決定の自由の中にあっても、男から切り離されているのでも、独立しているのでもないことに心を留めなさい。教会において女は男なしには存在せず、男も女なしには存在しません。神のお考えは、いつ

も男と女が共にあり、共に生きることでした。かしらとからだの一体性の中で、彼らは共に、一致して、話し合って、平和のうちに、互いに従い合い、補い合いながら行動するのです。

一方が他方なしには存在しないとは、どういうことでしょうか。人間の夫婦の創造をもう一度思い起こしてください。初めに女は男から出ました。男のわき腹からです。男に属するものとして、再び男と一体となるためにです。しかし、さらに考えてください。それ以来、すべての男は女から生まれてきます。男がいなければ女は存在せず、女がいなければ男は存在しないでしょう。両者は尊厳において等しく、価値において等しく、立場において等しいのであり、その違いの中で完全に補い合うのです。そのすべては神のお考えでした。神こそ、そのすべてが出てきた源であるかしらなのです。

このことを踏まえて、あなたがたに尋ねます。女が公の場で、しかもヴェールをかぶらず、頭を覆わないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。いいえ、コリントとローマ帝国の習慣に照らせば、それはふさわしくないと、あなたがたも同意するでしょう。

人々にとって自然の法則のようになっている風習や習慣というものがあるのです。男が風習や習慣に反して長い髪をしているなら、それは恥と見なされます。この点でも、女性の場合はまさにその逆です。女性の長い髪は彼女の栄光であり、生まれながらの飾りであって、人々もそのように感じています。長い髪は、男の栄光となるために、飾りとなるヴェールや外套のように彼女に与えられているのです。

男性にとってそれほど慕わしく見えるこの飾りを、彼女は集会では覆うべきです。男が覆わない頭によって自分のへりくだりを示すべきであるのと同じように、ここはこの栄光をもって姿を現す場ではありません。なぜなら問題

になっているのは、神とキリストの栄誉と栄光だからです。王の王である方の謁見に私たちを招いてくださるのは、この方なのです。

もしコリントで誰かがこれについて議論しようとし、頭のかぶり物というこの慣習に疑問を呈するなら、その人は、そのようなことはどこにもないということを自覚すべきです。すなわち、あなたがたが女性たちに命じようとし、自分自身に対して行っているように、女性が頭を覆わずに祈るということはどこにもないのです。そのようなことを実践している教会は一つもありません。ですから、頭のかぶり物について通常当てはまり、品位があり、誰にもつまずきを与えないことを守りなさい。

結びとまとめ

「この箇所の言葉遣いとパウロの結論は、誰かがコリントの家の教会におけるヴェール着用を制限するか禁止しようとしていたが、すべての女性、一部の女性、あるいは一人の女性がヴェールをかぶりたいと望んでいたことを示唆している。まずパウロは創造の記述を簡潔にまとめ、女が男から、また男のために造られたことが、女が男の栄光である理由だと説明している。男は女のかしらである。女は男から造られたからである。そして女のかしら（頭）は、したがって何らかの仕方で男の栄光を映し出し、あるいは表現している。創世記の記述において、女はまた男の栄光でもあった。すべての動物とは異なり、男を惹きつけるために特別に造られたからである（創世記2:18-23）。」[72]

「パウロの文書には性（ジェンダー）の神学が含まれており、**それは、パウロがギリシア・ローマ文化の概念と象徴、そしてギリシア語の言い回しを用いて創造の記述を説明する仕方の中に実現されている。**『かしら』という比喩をアダムに適用することによって、パウロは、エバが、アダム以後の人類の他の人々と同様に、複数のアイデンティティを持っていることを示している。女性は神のかたちであり、アダムのかたちであり、また『男の栄光』でもある。**女性を『男の栄光』と表現するパウロの言葉は、服従やより小さな栄光を示唆しているのではなく、付加的な栄光、すなわち男性に対する彼女の美しさの力を指し示しているのである。**同様に、私たちは、アダムが先に造られた（13節）と述べているテモテへの手紙第一2章13-14節のパウロの短い叙述の中に、男性の優位を読み込むこともできない。むしろパウロは創造の記述から相互性を教えている。パウロは男性を、女性の助けを必要とする、益の受け手として描いているからである。彼はそれを、その文化が理解するであろう概念で描いている。**女は男から形づくられたので、創造の記述においては、ギリシア語の用法で言えば、男が女のかしら（彼女の命の起源）として機能している。**しかしその後は、すべての男が女から生まれるので、女もまた命の起源なのである。それが創世記3章20節の『エバ』という名の意味である。

「それゆえ、神の設計によって、女と男は互いに独立してはいない。パウロが、創世記1章27-28節の創造の記述における女性の権威や、ギリシア語の慣用句『かしら』の彼の用法において、その権威に反論したり、それを再解釈したり、相対化したりしていると解釈しなければならない、やむをえない理由は何もない。男も女も神のかたちに造られ、両者とも支配するために造られた。その支配は、パウロによれば、それぞれの文化的な枠組みの中で、共同性と相互性という意味において行使されるのである。」[73]

福音がどの文化においても、神の栄誉のために、つまずきを与えることなく生きられうるというのは、実に見事なことです。最も偉大な宣教者である神は、すべての人に対して豊かであられます。福音はすべての民族のためのものなのです。

付録

以下の二つの本文配列は、キアスムス（交差配列。語や思想を交差的、対角線的に配置すること）と関係があります。一つ目の配列はシュナーベル（Schnabel）によるものです。それは、この箇所が男性にも女性にも同じ程度に語りかけていることを示しています。呼びかけの頻度から、コリントで誰が問題を引き起こしたのかを読み取ろうとしても、それでは**先に進めません**。

4節 すべての男は……自分のかしらを辱める

5節 すべての女は……自分のかしらを辱める

7節前半 男は神の照り返しである

7節後半 女は男の照り返しである

11節前半 主にあって、女は男なしには何ものでもない

11節後半 主にあって、男は女なしには何ものでもない

12節前半 女は男から出た

12節後半 男は女によって存在する

14節 男にとって恥である

15節 女にとって栄誉である[74]

ここに示すのは、デイヴィッド・E・ガーランド（David E. Garland）が区分しているような、この箇所、すなわちこのひとまとまりの思考の流れ、あるいは意味段落の純然たるキアスムスです。同じ文字A B C Dが、中心となる言明の前と後とで一度ずつ向かい合っているのを見るのは興味深いことです。その中心とは**10節であり、ガーランドはそれを女性の覆いについての核心的な言明として際立たせています。私にとってそれは次のことを意味します。頭のかぶり物を着けるかどうかを決めるのは女性です。それを決めるのは男性たちでも夫でもありません。彼女は自由なのです。**

A Introduction: the “Head” of Men and Women (vv.2-3)
Commendation (v.2); Summary of Headship (v.3)
B Shame for Men and Women (vv.4-5)
For Men (v.4); For Women (v.5)
C Social and Theological Reasons for Shame (vv.6-7)
Social Reasons (v.6); Theological Reasons (v.7)
D Creation of Men and Women (vv.8-9)
Men (vv.8a; 9a); Women (vv.8b; 9b)

E Reason for Women to be Covered (v.10)

D' Equality of Women and Men (vv.11-12)
Women (vv.11a; 12a); Men (vv.11b; 12b);
Equality in God (v.12c)
C' Social Implications for Women (v.13)
B' Shame and Glory in Men and Women (vv.14-15)
Shame for Men (v.14); Glory for Women (v.15)
A' Conclusion: Exhortation to Adhere to Teachings (v.16)

注

1. Hans-Jörg Ronsdorf、hj-ronsdorf@t-online.de、ご意見をお寄せください。2021年1月24日、2026年10月改訂
2. www.hans-joerg-ronsdorf.de
3. https://theoblog.de/eckhard-schnabel/16636/
4. Cynthia Long Westfall, Paul and Gender. Reclaiming the Apostle’s Vision for Men and Women in Christ, Grand Rapids: Baker Academic 2016.
5. Schottroff, L., Der erste Brief an die Gemeinde in Korinth, edd. E. W. Stegemann/L. Schottroff/A. Strotmann/K. Wengst, VII, Theologischer Kommentar zum Neuen Testament, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart 2013, 197.
6. Westfall, Paul and Gender, 13頁（以下、頁数のみを記す）。
7. 13頁
8. 17頁
9. 20頁
10. 25頁
11. 26頁
12. Eckhard J. Schnabel, Der erste Brief des Paulus an die Korinther, Historisch-Theologische Auslegung, Witten/Gießen: SCM R. Brockhaus/Brunnen, 第4版 2018年, 625頁。
13. 26頁
14. 27頁
15. 29頁
16. マトローナ（Matrona）とは、ローマ帝国の社会において、ローマ市民と結婚した女性を指す呼び名です。彼女の居場所はたいてい家の中にあり、家族と家事の世話を担っていました。彼女は家長、すなわち父親または夫の保護と後見のもとにありました。（出典：Wikipedia、記事「Matrona」）
17. 29頁
18. 31頁
19. 32頁
20. 33頁
21. 37頁

22. Schnabel, E. J., Der erste Brief des Paulus an die Korinther, edd. G. Maier/H.-W. Neudorfer/R. Riesner/E. J. Schnabel, Historisch-Theologische Auslegung Neues Testament, SCM R. Brockhaus; Brunnen Verlag, Witten/Gießen, 第4版 2018年, 602–603.
23. 42頁
24. 44頁
25. たとえ一部の女性たちが自分から頭のかぶり物をやめようとしていたとしても、パウロの基本的な主張は変わりません。しかし、この想定はむしろありそうにありません。
26. 特に断りのない限り、Elberfelder Übersetzung（ドイツ語聖書翻訳）, Edition CSV による。
27. これらの考察は、私の本「Frauen, vergebt uns!」（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）の6.2章を補うものです。その内容のほとんどはここでは繰り返しませんので、両方の論考を読まれることをお勧めします。
28. 87頁
29. 38頁
30. 84頁
31. 80頁
32. 82頁
33. 85頁
34. 89頁
35. 90頁
36. Schnabel, E. J., 601
37. Schnabel, E. J., 602
38. 40頁
39. Schnabel, E. J., 602
40. 29頁
41. Schnabel, E. J., 604
42. Schnabel, E. J., 605
43. Schnabel, E. J., 606
44. Schnabel, E. J., 606
45. 72頁
46. 65頁
47. Schnabel, E. J., Der erste Brief des Paulus an die Korinther, edd. G. Maier - H.-W. Neudorfer - R. Riesner - E. J. Schnabel, Historisch-Theologische Auslegung Neues Testament, SCM R. Brockhaus; Brunnen Verlag, Witten; Gießen 2018, 第4版, 608–609.
48. 70頁
49. 62頁
50. Schnabel, E. J., 609
51. Schnabel, E. J., 609–610
52. 103頁
53. Schnabel, E. J., 610
54. Schnabel, E. J., 610–611
55. 73頁
56. Schnabel, E. J., 611
57. Schnabel, E. J., 613–614
58. 30頁
59. Schnabel, E. J., 616
60. Schnabel, E. J., 616–617
61. Schnabel, E. J., 617

62. 70頁
63. Schnabel, E. J., 617–618
64. Schnabel, E. J., 619
65. Schnabel, E. J., 619
66. 40頁
67. 41頁
68. 41頁
69. 42頁
70. Schnabel, E. J., Der erste Brief des Paulus an die Korinther, edd. G. Maier - H.-W. Neudorfer - R. Riesner - E. J. Schnabel, Historisch-Theologische Auslegung Neues Testament, SCM R. Brockhaus; Brunnen Verlag, Witten; Gießen 第4版 2018, 622–623.
71. Schnabel, E. J., 624
72. 98頁
73. 105頁
74. Schnabel, E. J., 590